

商店街と共に歩む
—若者と子どもたちの居場所—

NPO法人
アンガージュマン・よこすか
事務局長 島田徳隆



横須賀市上町の商店街の中で不登校の子どもたちとひきこもりの若者たちが集まる居場所を運営しています。

県と市より空き店舗対策の助成金を受け、商店街が借り上げる形で本法人は立ち上がりました。前身は不登校の親の会でしたが、活動が活発になるにつれ、子どもたちが常時集まることの出来る場所を望むようになりました。

親の中に商店街（上町商盛会）と繋がりのある方がおり、交渉の末、上記のような形をとることが出来たのです。

不登校やひきこもりを経験した人が、人の集まる商店街での社会参加を目指す、という目的は一見相容れないものと思われるかもしれませんが。

しかし、人が集まる中でこそその社会参加ではないでしょうか。商店街には若者がとても少なく、後継者不足も言われて久しくなります。その中で、本法人に集まる人たちが商店街活動に従事し、日々を過ごすことは商店街にとっても若い新鮮な空気を入れます。

商店の人たちもつかず離れず見守ってくれています。接客のプロが集まっていますから、彼らと接することは実はいとも簡単なことなのです。

ゆるやかに流れる時間の中、ゆるやかな社会参加のあり方を今後も模索していくつもりです。

住民の立場でできることを

同じ住民としてできることについて横田さんは「場所を提供して



いるだけですが、集まった親たちは自然と子どもの成長に対して雑談が始まります。話題の中で子育てに対しての疑問点が出た時、サロンのサポーターを含めて子どもの成長に関する専門的な知識はありませんが、子育て経験者である一人の親としてちょっとしたアドバイスができます。」と話します。子育てサロンでは、住民は地域の身近な相談役として親子に気軽に関わり、参加者とサポーターが子どもの成長を確

認し合える環境ができるため、親もゆとりができ安心した気持ちで子どもと関わります。サロンを展開していく上で「担い手となるサポーターの発掘が難しいです。子育てに落ち着くと仕事に就く傾向があり、担い手になりにくいですが、サロンに来てくれている親たちが、これからの担い手になってもらいたい」と横田さんは子育て家庭への期待を寄せながら、「親が歩いて行ける範囲にサロンを展開していきたい」と各自治会単位のサロン設置の展望を話し、地域で展開する必要性を確信しています。

この取り組みから、地域で安心できる場所があることで、子育てへの不安が緩和される効果があり、親の身近な相談役として住民が精神的に支えている様子が見えます。安心して子どもを育てることができる地域へとなるために、子育て家庭を精神的に支える地域住民には身近な場面で、身近な存在として役割が期待されるのではないのでしょうか。

次号では、子育て中の親同士がネットワークを作りながら子育て家庭を支える活動を取り上げます。

（企画調整・情報提供担当）